

たより

『美紗の会』

ニュース

第八号

平成五年九月十五日

発行者
「美紗の会」事務局
☎ 03-3441-2726

水と月との調べ

11月28日船上演奏会

豪華客船船上での邦楽演奏
と言う意欲的な試みが行われ
ようとしている。
会主と、既に会主と共に数
度の海外演奏を試みている尺
八の宮崎青畝、それに御馴染
みの西松孝子師の琴。
豪華演奏陣に舞台を提供す
るのはわが国の代表的客船
『にっぽん丸』。
十一月二十八日の演奏を目
指し準備が進められている。

古今東西、舟遊びと楽の音
はつきもの。多くの祭りの絵
巻物、物語に舟遊びの大切な
主役に楽人達が描かれている。
そして今、最近海外でまた
国立劇場初め多くの舞台で意
欲的な活動をしてきたわが会
主が地唄西松流の家元西松布
唄としての演奏の場として
『にっぽん丸』を選んだ。
『にっぽん丸』の詳細は別
記の通りだが、日本の古典芸
能の一つ、地唄の第一人者の

演奏を聴く舞台としては申し
分のないお膳立てと言えよう。
演奏は十一月二十八日、午
後四時から。曲目と出演者は
次の通り。

* 萩江節

『金谷丹前』

唄と三弦 西松布唄

琴 西松孝子

* 尺八演奏

『月によせて』

尺八 宮崎青畝

* 唄

『今朝の雨』ほか

唄と三弦 西松布唄

* 地唄

『残月』

唄と三弦 西松布唄

琴 西松孝子

尺八 宮崎青畝

案内によれば「汐風はこ
ぶ邦楽の夕べ」と銘打つ会は
「秋の名残りに
妙なる尺八と
糸の調べに耳を傾け
月の光を浴びながら
グラスを傾け
美味しい料理に舌づつみ
そんな豪華な船の夕べを
お届けいたします」
と謳っている。水と月と酒と
料理に素晴らしい楽の音を楽
しみにしたい。

なお、入場券は食事付きで
一万三千元(子供半額)。
本企画を推進している本郷
氏(電・SANTOS)、加藤
さん(電・SANTOS)及び
会主のところにあるのでどん
どん申し込んでほしい。

「にっぽん丸」物語
客船『にっぽん丸』はわが
国の代表的な外航クルーズ客
船の一つ。
平成二年神戸で誕生したピ
チビチ娘。長さ一六四m、幅
二四m、二万二千トンで商船
三井客船が運航している。
演奏会の行われるドルフイ
ンホールは二五〇席の客席を
持つステージで二階席一五〇
と合わせ豪華な雰囲気を作る。
処女航海以来官原洋一、五
木ひろし、ベギー葉山など有
名芸能人がここに立っている。
その他大洋を眺めながら湯
に浸れる大浴場、南国ムード
の全天候型プールや和室「吉
野」など演奏会の合間に船内
見学を楽しむことができる。

幸いなことに赤坂組の齋藤
君が6月から客船会社に就職
したので、陰ながら何かと協
力してくれるのではないかと
期待している。
さて美紗の会の皆さん、ど
うか今度の『にっぽん丸』で
の十一月二十八日(日)の演
奏会を是非成功させるよう友
人知人家族の皆さんを誘って
参加して下さい。そして師匠
の美声を楽しまれると共に
『にっぽん丸』の料理を十分
味わって下さい。我々赤坂組
は船内案内など勤めさせて
頂きますのでよろしくお願い
致します。

船上演奏会開催に際して 本郷公基

れに美人のお師匠さんから小
唄の遊び心を習えればもう言
うことはないと思つて始めた
次第である。
然るに何年か続いているう
ちにお人柄に魅せられた
所為もあろうが、師匠の實力

ようになつた。
世間では實力のある芸術家
にはお金持で社会的地位の高
い人がスポンサーになつて成
功するものであるが、われら
が布唄師匠には今迄のところ
それが見られない。金と力の

考えたこともあつたがこれは
色々難しい条件があり無理
であることが判つた。
それでは客船と結びつけて
考えられないかと思ひ至り
『ふじ丸』や『にっぽん丸』
のクルーズではリピーターの

いよいよ豪華客船『にっぽ
ん丸』の船上で布唄師匠の演
奏会が実現しようとしている。
この企画の発案者又は仕掛人
の一人として、又美紗の会の
会長出身母体である赤坂組の
メンバーとして是非共これを
成功させ次への発展へと繋ぎ
たいと考えている。
そもそもこの計画は次のよ
うな動機から生れたのである。

が素晴らしいものであること
に気が付いた。邦楽の世界で
もトップクラスの素材の持主
ではないかと思つた。師匠の實力を少し
でも多くの人々に知ってもら
う方法はないものかと考える

ない色男の集団である赤坂組
にはその役割を期待されても
無理というものである。然し
我々にも何かできるのではな
いか。例えば飛行船々上での
邦楽の演奏をテレビで放送す
るといふのはどうだろうか

中心は中高年層であることを
勘案して船旅中のエンターテ
イメントの一つとして師匠を
中心として邦楽と踊りの演奏
会はどうだろうかと思ひ至り
そこで昨年の暮、師匠と加
藤マネージャーに試みに『に

っばん丸』のワンナイトクル
ーズに乗船してもらつた。お
二人に客船のハードとソフト
をご理解して頂いた上で、客
船会社の担当者と具体的な打
ち合せをした結果、最初は東
京港の晴海埠頭に停泊中に船
内の大広間で西松布唄の発表
会を開催するのがよいのでは
ないかとの結論に達した。劇
場が『にっぽん丸』になつた
わけである。但し劇場での発
表会(演奏会)との違いは今
回の場合は客船の内部を見学
できること及び美味しい客船
の食事を味わって頂けること
である。

『美紗の会』 会員訪問 (二)

白金台塾

田中正大さん

芝でうまれて六十五年

言われた通り地下鉄を出ると『芝商店街』のアーチがある。向こうから田中さんが手を振ってくる。

『一郵便局に行くので家で待っていて下さい』

商店街と言っても今は名ばかり。事務所、マンションビル、ある店の看板がわずかにその名残りを止めている。

『ふとんの田中』のサインが出ている店の中は広くて明るく気持ちがよい。

奥様の美哉さんが、田中さんのお父さんは、昔この辺りで腕の良い職人として通っており四、五百軒の得意先を持っていたと話して下さる。ところが最近はその様相が一変、人口が大幅に減って商売も大変だそう。

田中さんは文字通り『芝で生まれて』育った芝っ子。

『親・子・孫と三代ここに住んでるんですからね』、お座敷代りにと案内してくれた近くのホテルの喫茶室で話が始まる。

昭和二十二年東京第一師範学校を卒業。青春時代はトルストイやドストエフスキーを愛した学生だったが、小学校に奉職した田中さんは戦後の

学制改革期の中で多くの教子を社会に送り出した。

最初の生徒はもう五十五才、若い方でも四十六才。今年も年に一回は同窓会をやる。この前は湯河原に三味線を持って行き皆に聞かせたそう。

『いやー、仕方なく聞かされたといつたところでしょう』と、笑う良い先生。

その先生も家業を継ぐため今の商売に。『おやじが元氣な内にと継いだ商売ですが、今考えるところが良かったのか』。でも話す顔には落ち着いた満足感が伺えた。

三味線を始めて十年と聞いたがその演奏はとて十年の年期とは思えない。

『実は僕のおふくろは街の三味線のお師匠さんだったんです。だから生まれた時からというより、母親のお腹の中にいたときから、僕は三味線の音色を聞いて育ったんです』

十年ほど前、一寸したきつかけで橋場先生のお母さんに冗談交じりに三味線を習ってみたいといったのが縁。

『僕は声が悪いのでカラオケは駄目。勝負事やスポーツもやらない。若い頃新劇に熱を上げた時分もあったが商売

をするようになってからはこれといった趣味もない。でもいつか三味線はしてみたいといった漠然とした思いはあったんです』

ところが稽古を始め、三味線を手にした時、自分の中にあったリズムみたいなものが自然にそこに出てきて驚く。

『譜面の通り棹の位置を押さえ弾いてみると、全然知らない曲ではなくて、体の中にあったものが音符に導かれて出てきたといった感じがしてね。自分でも吃驚しました』

そんな素質があつてか稽古を始めて四か月目にはもうおさらい会にでる。

『そうそうあれが十年前、一回目のゆかたさらいでした。渋谷の冷房の利かない暑い会場だったな。あの頃のメンバ、嘉本、橋本、樋口、大西それに佐久間さんなんかには今でも冷やかされますよ』

『練習は？』

『最初の五年ほどは三十分から一時間くらい毎日やってましたが、最近は一週間のうち半分くらいかな』

お孫さんが時々来て聞いているが、奥さんについては『同じ家だから聞いてやっていると聞いたところではないですか』と照れながら話す良いご主人である。

る。

『時々小唄の替手などを弾くこともあります。僕は長唄が専門なんです。稽古では『喜三の庭』『菖蒲浴衣』や『秋の色種』などやりま

したが、自分で聞くのは『鶴亀』とか『鏡獅子』のように能とか歌舞伎から出たようなものが好きです。昔武士階級の楽しみとされてきた能を、長唄という形で町人が楽しんだ、

自分では結構艶っぽいところもあると思っているが、人からは『貴方が三味線をやるとは想像できない』と言われたりして、生真面目に見えるのですかね』と淡々と話す。

今は、息子さん、娘さんの二家族と一緒に住み、四人のお孫さんに囲まれ『スタンブラー』に付き合う幸せ人生。

十年前に三味線を始めて本当に良かったと思ふ。今からではもう遅い。三味線がきっかけで思いがけない人と再会できた。縁が出来たり。この間も柵屋三之介という長唄の師匠になつていて小学校の同級生が訪ねてきたそう。

『商売仲間でも小高さんや岡崎さん組合の寄り合いで弾くことなどあるんですよ』と話す田中さん。

芝のお母さんの播いた種が白金の師匠によつて幸せの花を咲かせている。と感じながら芝公園駅を後にする。

(昭和二十一年生れ東京出身)

『会員からのたより』

皆様お元気のご様子で何よりでございます。私も変わらず元気で学校に通っております。

日本はそろそろ梅雨に入るころでしょうか、こちらも冬に入る前の季節の変わり目か少し雨がふつたりして、だんだん寒くなってきました。

毎回、美紗の会のおたよりありがとうございます。先生も去年のアメリカ公演に続きニューヨーク公演とお忙しいですが、お体を大切にしてください。しかしますますの御活躍に生徒としてうれしく思います。美紗の会も新しい生徒さんもふえ楽しそうな会が思い浮かびます。私も日本に帰った時、先生のお役に少しもたてたよう英会話をマスターしたいと思ひますが、なかなか上達いたしません。でも三月の末には、シドニーへ

一人旅に一週間出かけました。てんてこまいの道道中でしたが新しい友達もでき、思い出にのこる一週間でした。旅の途中人が集まる場所あちこちで楽器演奏やパフォーマンスがみられ、私ももう少しお三味線を練習しておけば、いいおけいこ場所とアルバイトもかねられたのと思ひました。日本に帰った時には少し身を入れておけいこしたいと思ひますのでよろしくおねがいします。

先生も夏のゆかた会、秋の松風会、その他いろいろな行事が続く御様子、お体お勞り下さいませ。

私も来年のおひきぞめには参加できると思ひます。今から楽しみにしております。

Keiko (在オーストラリア・中西けい子さんより、紙面の都合で一部省略しました)

『編集雑記』

* 吊橋や 百歩の宙の 秋の風 水原秋桜子 * 八王子の奥の深谷だというから、青梅か奥多摩の辺りだろう。

* 昨年は秋は赤坂組の仲間と青梅、奥多摩へ行つた。今年には台風が邪魔されながら瀬戸内、九州を旅した * 酒を飲み交わしながら童心に帰り、他愛ないことをしゃべり合う

* 何の遠慮もいらぬ、心のわだかまりもない。気まま

に飲み、語り、安らぐ * 本郷君が指摘するように、赤坂組の仲間によれば、これこそ美紗の会の目的の一つだ

* 浮き世の憂さの捨てどころでもあるまいが、誰もが吹き荒ぶ秋の風のごときは忘れ * 師匠はドイツ・日本文化の紹介に。でも、弟子どもは鬼の居ぬ間に洗濯ばかりとは行くまい

* 十一月にはいよいよ美紗の会による演奏会が行われる。自分達の手にする初めての公演。是非とも成功させねばならない

(た)